

共通体験がもたらした繋がり

MSW 高岡 良江

久美子さんのお話の中には、私も存じ上げている方も含めて、沢山の当事者が登場されました。それぞれの方の想いや体験を、久美子さんとの出逢い方も合わせて伺い「このように繋がっていくのか」と、不思議な導きさえ思わせられました。

初めて私がこちらの講座を聴講したのは2014年の秋です。「私たちのことを私たち抜きにして決めないで」というNHKの番組をゼミで視聴しました。

そして認知症の当事者が登壇して、とうとうと話される姿が衝撃的であったのを思い出します。私は病院で働いていて、なんだかおかしい、けれどもその疑問が何なのかが見つからずにいました。医療が進歩することに寿命は延びて、いつかは認知症にならない人は誰もいない、と言っても良いでしょう。

入院患者さんでも認知症状が全くない人はいません。しかし、だからといって全く何も分からなくなっている人もおられません。その人の状態に合わせて対応していけるのが本当の専門性であるはず。本人の意思を考慮せずに家族や支援者で方向性が決定されて、認知症の方が精神科病院に入院されることがお話にありましたが、同じことは精神科でなくてもあります。

療養病院への入院や施設入所も本人の意向を聞かずに家族の都合で決められることがほとんどだと思いますし、治療方針についても大抵は家族に了解を得て決定しています。多くの患者さんが入院に納得はされていません。他の疾患と認知症を併せて持ち、認知症の周辺症状が見られれば当然のこととして沈静薬等が処方されます。

「私たちのことを私たち抜きにして決めないで」というのは、医療全体に言えることではないでしょうか。

ADIの議長が、丹野さんが講演された直後に「私たちが言ってもらいたいことをすべて言ってくれた！できるだけ長く、できうる限り、これを続けてほしい。それが君の“生きる意味”になるんだ！」と言われたこと。

これは、状況は違えども、同じような想いを持ちながら、言葉として発せられていない現実が世界中に存在することへの確信でしょう。久美子さんがその現場に居合わせて、寄り添って、心を震わせ、事実を真実として遺し、講義で伝えてくださったことは、認知症という私たちの共通体験がもたらした繋がりです。

私は病院の中ではある意味「黒子」です。だから沢山の体験に触れて、当事者に寄り添いながら、久美子さんのように何が課題なのかを言葉にし、「真実」にできるように日々を過ごしていきます。ありがとうございました。

—*★*—*—*★*—*—*★*—*—*★*—*

高岡良江様

ご感想ありがとうございました。

2014年初回放映の「私たち抜きに私たちのことを決めないで」をゼミで視聴してくださっていたのですね。それからもう8年も経つとは信じがたい思いです。何かが起ころうとしているうねりの中で、たまたま、必然的なつながりの一端になっていたような感覚です。

医療の現場の大変さはあると思いますが、「その人の状態に合わせて対応する」ために、その人の声を聞くことが、よりよい意思決定を生み、現場の専門職の方々も、家族の方々も楽になる道があるのではないかと考えております。

番組に登場したワーキングの設立者であるジェームズさんは脳血管性の認知症がありますが、ダメージを受けなかった部分の残存機能は比較的しっかりしているようです。いくつかの内臓疾患と虚血性の問題を抱え、ワクチンの副反応でダメージを受けながら、認知症とともに生きている彼は、多様な認知症のひとつの姿を示しています。

そうやって自らの姿を見せて教えてくれようとする人には深い敬意を感じます。

ご返事とお礼まで。

馬籠拝